

## はじめに

2006年12月2日、神奈川県高等学校教職員組合（神高教）横浜南支部が企画し、（財）神奈川県高等学校教育会館が主催する「教育文化フォーラム2006」が、横浜市磯子区の神奈川県労働文化センターで開催されました。講師はNHKアナウンサーの住田功一さんで、演題は『大地震発生！ その時あなたは……』でした。

住田さんは、たまたま帰省していた神戸のご実家で阪神淡路大震災に遭われました。地震発生から20分後に最初の電話レポートをされ、これは被災地からの第一報として全国に流されました。その後も約1か月の間、変わり果てた故郷の状況を取材・放送されました。この経験を元に、まだ大地震に遭っていない人たちがどうすれば被害を減らせるのかを考えてほしい、と様々な活動を続けていらっしやいます。

阪神淡路大震災から10年あまりが過ぎ、大地震への関心が薄れていた中で、私たち学校に勤める者が知らなければいけないこと、気をつけなければならないことを当日はお話いただきました。講演録は2007年度に神高教横浜南支部傘下の分会員に配られました。それ以外の人の目に触れる機会はありませんでした。

そんな中、2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。校舎内にいた生徒を校庭に避難させるということは、ほとんどの教員にとって初めての経験だったでしょう。その後も帰宅困難者が出たり計画停電が実施されたりして、いつも通りの学校生活ができなくなりました。この困難を乗り越えるための経験や知識の不足を痛感した人が多かったと思います。そこで、この埋もれていた講演録をより多くの方々に読んでいただくことで、もっと大きな震災に見舞われたときの心構えを持っていただけのではないかと考え、この講演録を公開することにしました。

いつ起きるかわからない大地震。起きてしまったらすべてが「いつも通り」には行かなくなる大混乱の毎日。避難所に指定されているかどうかにかかわらず、学校には被災者が押し寄せてきて、学校に勤める私たちは、生徒の安否確認や授業再開の準備だけでなく被災者へのケアを強いられます。次々に発生する問題をどのようにこなしていくのか、試行錯誤になるのは仕方ないことですが、何も心構えがない中では混乱に拍車をかけてしまいます。この講演が、いくらかでも「その時」のための足しになったら幸いです。この講演録を読んでいただければ、今まで気づかなかったことがいくつも見つかると思います。

実際経験していない人へ語り継ぐことの難しさ。想像を絶する現実と想像力とのギャップ。こうした問題を解決することは決して容易なことではありませんが、やらなければいけないことの1つでしょう。この講演録がそういうことの役に立てればと願っています。

## 「大地震発生！ その時あなたは……」

講師 NHK大阪放送局アナウンサー 住田功一氏

今もご紹介いただきましたが、私は放送局に勤めている人間でして、防災あるいは防災心理学とか、工学系の専門家でもありません。一市民として阪神大震災に遭った時に感じたこと、そしてやはり被災して大変苦労された方、あるいは肉親を亡くされた方から託されたいろいろなメッセージを自分なりに受け止めて、それを1人でも多くの人にお伝えできればなということでお話しいたします。

今回は学校の関係の皆さん向けということでお話ししてまいります。私の父も、兵庫県の県立高校の教師をやっておりました。震災の時には退職して非常勤だったものですから、あまり父は苦労していなかったかもしれませんが、しかし父の学校もそして私の母校も、私の母校に至っては小学校も中学校も高校も大学も全部避難所になりました。もういざというときには、とやかく言っている間もなく、ドドッとその事態が押し寄せますので、そういったお話ができればと思います。

### 年末年始の仕事を終えての遅い冬休み

私は、今は大阪放送局で夕方のニュースをやっているんですけども、当時は東京のニュースセンターに勤務しておりまして、朝の「おはよう日本」という番組のアナウンサーをやっておりました。

今井義典さんという経済・国際畑のキャスターと、そしてその横に当時まだ新進気鋭の有働由美子アナウンサーが2人構えまして、その横で今井キャスターが「こんなニュースをお伝えします」と言ったらVTRに入るんですが、VTRのバックでコメントをずっと読むという、ニュースリーダーを1994年度はやっておりました。

あの日は、とにかくその瞬間が来て「あー自分は何でこんなところにいるんだろう」と思いました。それが災害です。

「ゆく年くる年」で年末年始はつぶれたものですから、あの日は私は遅い冬休みを取っておりました。あのときの「ゆく年くる年」は横浜上空のヘリ中継の担当だったんです。

1995年の元旦、午前零時をまわって、ゴーン「明けましておめでとうございます」。そこでアナウンサーのトーンががらっと変わるんですね。明るく新年向けのコメントがつくわけです。いくつかお寺とか街の風景、教会などが切り替わって、パラパラパラというヘリコプターのノイズが入ってきます。

ちょうどこの横浜の上空を飛んでいました。非常にきれいな光景でした。真っ黒なビロードの上に宝石をパラパラッと撒いたように、キラキラした街の明かりが見ていました。ずーっと東京湾にカメラを振り込みますと、アクアライン（木更津の方に向けて走る、東京湾横断道）がちょうど開通する



という年だったものですから、「この東京湾を横断する未来の橋、この向こうには明るい未来があるでしょう」というようなコメントを付けたのを覚えています。

私が「ゆく年くる年」を担当したときはあまりいいことが起きません。

私は1月13日金曜日に仕事を終えて、14、15日が土、日。15日は当時まだ固定の成人の日でしたので16日月曜日が振替休日でした。

## 地震発生の瞬間

そして、17日は、私はふるさとの神戸の実家で朝を迎えました。前日大阪城の近くのホテルで後輩の結婚式があったものですから、結婚式出て結構お酒が入ったりしてくたびれてカーッと深い眠りについていました。

そんななか、ちょっと浅い眠りにさしかかっていたころだったんしょう。キクキクキクって感じで、今も静かにしてますと「あれっ？」って感じるぐらいのキクキクキクって揺れがあって、「あー何だろうこれ」と思った瞬間に、ドーンという音が起きました。大きな音とともに、大変激しい縦揺れでありました。

私は神戸の実家には、もう弟も独立して千葉の方に出てきておりましたので、パイプベッドがあって、僕らが実家に帰るとそこに寝ることになっていたんですが、簡易なこのパイプベッドごとドーンと跳ねました。大変恐ろしい音です。木でできたものからガラス製のものから全部一斉にドーンと持ち上がってそれがドスンと落ちますので、ドーンの後でガシャガシャガシャという音がするんですね。またドーン、ガシャガシャガシャ、またドーンと来て、まだドーン…、ドーン……、とだんだん遠くなりました。

最後にかすかにドーンと鳴って、そしてシーンとしました。

真っ暗になりました。停電です。

あの何ていうんですかね、これが地震なのかどうかはまずわからないんですね。グラグラとくると地震だという感じなんですけど、強烈な縦揺れだったんです。どんな揺れだったかとよく訊かれるんですが、鉄板の上に寝ていて下からお寺の鐘突き棒でドーンとぶつけられたような、あるいは鉄道がコンクリート製の枕木部分で脱線したかのような、いずれも僕はそんな経験はしたことないんですが、もうそうとしか例えようのないぐらい硬い揺れが、ガッツン、ガッツンと来ました。

そのあと、シーンと静まり返りました。家の中には父と母がいるんですけども、しばらく黙っていました。声にならなかったのかもしれない。

実家は3DKで、古い築二十数年の団地の5階建の3階でした。20歩も歩けば隣の家に行っちゃうぐらいの狭い家なんですけども、シーンとして…。

やがて「大丈夫か？」という父の声と、「大きかったねえ、大きい揺れやったねえ」という母の声で、「やっぱり地震なのかな」と思いました。でも、なぜ部屋に入ってこないんだろうと思って襖を開けますと、これぐらいの幅の(120センチほどの幅の)本棚、高さは自分の背丈ぐらいですけど、それがズルッ、ズルッ、ズルッとせり出してきて部屋に入って来られなかったんですね、両親が。

で「大丈夫、大丈夫」と言って私は落ち着いている様子を見せました。落ち着いているつもりでした。

父は非常に気が短いA型で、細かいことに気がつくタイプなんですけれども、父が早速母とケンカしていました。「だからあれだけ言っただろう！」とか言って怒っているんです。何だろうと思ったら

「懐中電灯にちゃんと新しい電池を入れとかないとダメじゃないか」とか言って2人でやり合っているわけです（笑）。

僕はこういう親の真似だけはしたくないと思いながら「ハイハイ」と言いながら、私は電話をかけようとして、上司の指示を仰ごうと東京のニュースセンターに電話をしたんです。しようとしたんですが、受話器はシーンとしていました。無音でした。

そういう時には電源のつながった留守番電話でしたので、電源を抜いてジャックをそのまま差し込んで普通の黒電話のように使おうと、こうすれば大抵の電話はつながるんだという自分なりのマニュアルでやって、それでまたシーンとしてるんですね。ジーとかツーツーとかいうと思ったんですけども…。

予想に反する反応が2度立て続けに起きると、さすがにイライラしてきまして、私は母に向かって「何でこんな古い留守番電話を、いつまでも後生大事に使っているんだ！」と書いていました。父によく似ていると言われるんですが、同じ行動を取っておりました（笑）。

母はこういう私たち父子を放っとして、さっさと次の行動にかかってました。隣や、上下階の人たちに「奥さんのとこ大丈夫？」「元気？ 大丈夫？ 無事？」とか言って、声をかけあっているんですね。やっぱり地域に根ざした人とそうでない人の行動ははっきり分かります。

ご近所もどうやら大丈夫ということになったところに、つながらない電話をどうしようと思っていたら、向かい側の302号室の柴藤さんの玄関口で、ご主人がしゃがんで「はい、はい」とか言って電話をしているのが見えたんです。隣の電話はつながる！「すみません、それ終わったら貸してください」と言って、すぐに電話を引たくるようになりました。

東京にかけると、一発でつながりました。

緊急のときには、被災地に電話が殺到しますので、例えば東京から被災地へ向けての電話はなかなかつながらない。ところが、被災地から近所、被災地同士もダメなんです、被災地から遠距離へ出る電話は結構つながる。

それからあともう1つ最近の情報ですが、携帯メールは結構すき間を使ってつながる。ちょっと遅れ遅れですけども、中越の時には新潟近辺にいる人から私のところに、わりとタイムラグなしにメールが来ました。

で、なぜ私の家の電話がダメで、隣の家の電話が繋がったかという理由が気になりますね。NTTの人に訊きますと、とにかくたくさん殺到するので、輻輳を防ぐために回線の容量をセーブするんだそうですね。規制すると、そこがまずつながりにくくなる。

「ただいまつながりにくくなっております」というトーキー（テープ）が流れたり、話中のツーツー音がします。

それでは、わが家が全く「無音」だったのはなぜかと訊いたら、うちの市内局番は851という局番なんですね。078-851の何番。これは昔からそのエリアにある番号なんです。

つまり、市内局番「851」の交換機には事業所とか、神戸市灘区ですの造り酒屋さんとか、そういうところがいっぱいそこにぶら下がっているんです。

地震の揺れで、受話器がいろいろな場所で外れると、受話器を上げて、さあいまからかけるぞという通話を申し込みが来たのと同じ状況になるんです。

交換台にワーッと通話申し込みが殺到する状況になって、交換台がパンクしたんじゃないかということなんです。

しかも無人の事業所ですので、もう1回置いて復旧して、つまり通話申し込みを取り下げるっていうことをしないまま、ダーッと殺到したまんまになったので、その交換台がダウンしてしまい、我が家の電話はいくら受話器を上げてても無音のままだった。

一方、隣の柴藤さんはわりに最近引っ越してきた人だったので、842の何番という、新しい市内局番だったので、交換機がパンクせずに生きていた。だから、通じたんです。

目の前の電話はダメでも、全然違う市内局番の電話を選ぶとつながるんだというのは後でわかったんですが…、とにかく東京につながったんです。

## 最初のレポート

午前6時4分に電話がつながりました。すると東京のデスクは、「すぐにレポートせよ」といいます。

私は実はポンポン跳ねている間に秒数を数えておりました。これはもう職業柄、どういう揺れだったか、報告するために反射的にとった行動でした。

およそ40数秒揺れていて、私のデジタル時計は5時47分を過ぎていましたので、46分すぎから47分をまたいでの40数秒だったという認識でした。

東京のニュースセンターには、同時に神戸放送局とも電話がつながっていたんです。神戸放送局の関記者の電話とほぼ同時につながっていました。あのスキップバックの映像のなかで、ガサガサッと揺られる中で、布団をいったんかぶってそしてまた出てきて神戸海洋気象台に電話をつかむシーンが何度も出ましたが、あの関記者と同時に電話がつながったんです。けど、なぜか東京はキーを私の方に先に倒しちゃったらしくて、私が神戸からの第一報になってしまいました。それが午前6時4分のことです。5時46分発災と言われてますので、およそ20分後です。

ところが、私の実家があるのは、神戸市灘区の鶴甲団地という六甲山の斜面を削ってできた、高台の斜面を切り崩した団地なんですけど、非常に硬い山の地盤でしたので、小学校区の中で亡くなった人が1人もいないという大変めずらしい地域でした。隣の小学校区、つまり中学の校区の中では多くの人が亡くなりました。931人という方が同じ灘区の中でも亡くなるわけですが、私の小学校区は1人も亡くなっていない。

非常に硬い縦揺れでした。普通そこに横揺れが加わった地域では、シェイクされてしまってねじれるんですね、建物が。それで倒壊するということが多くなる。強烈な縦揺れの場合はドーンと持ち上がってドスンと落ちる、ドーンと持ち上がってちょっとズレて落ちるぐらいですので、せり出したぐらいで済んだわけですね、本棚も。

ですから我が実家は非常に被害が少ない地域だったわけです。

マニュアルには「炎が見えるか」というチェック項目があるんですね。つまり炎や煙が上がっていたらこれは被害が出ているということなんですけど、残念ながらうちは団地でして、前の号棟しか見えない。すぐ後ろ側は六甲山の山すそなんです。だから見る限りでは炎や煙は見えない。もう1つマニュアルに「サイレンが鳴っているか」とある。これは緊急車両が出ていることを示すのですが、それ以後1時間に1回ぐらいしか緊急車両とはすれ違いません。緊急車両が出払ってシーンとしてます。サイレンも鳴ってない。マニュアルに照らせば、「被害はほとんどでていない」という事になるわけです。

私の父は本が好きで、世界史の教師だったものですから、いろんな本がいっぱい置いてあって、あと全集本なんか後生大事に並べているものですから、家の中は本棚がズラッと並んでいます。定

年退職したその退職金でもって、本棚の上に作り付けの戸袋まで付けちゃいまして、本棚とのすき間に、また子どもの昔の賞状なんかをぎゅうぎゅう詰めて、天然の「ツッパリ君」(防災用具)みたいになっていたものですから、結局家具はうちは1つも倒れなかった。

お隣のお家は弱い本棚が倒れたと言ってましたけれども、私の家はなぜかほとんど被害がない、身の回りは。すぐ裏側にある給水タンクも無事だった。

というわけで、私が報告した神戸からの第一報は、震度6強から6弱のエリアなんですけど、震度5強、5弱ぐらいだという内容のレポートが出てしまうんですね。私は大変それで後でつらい思いをするんですが、そんな中で私の1995年1月17日というのが始まりました。

それで私は東京とやり取りする中で、東京のデスクは「また電話するから、電話のそばで材料をそろえてレポートできるようにしろ」って言うんですが、ついで1回も東京からは折り返しの電話はかかってきませんでした。それはさっき言ったような理由です。

同じく神戸に帰省していた広島放送局の入江憲一アナウンサーの電話がつながってレポートするんですが、彼の実家は隣の区の高台なんです。見晴らしのいいマンションで、神戸を一望できるんですね。彼は「何本も煙が上がってる」っていうレポートをします。これは6時44分、およそ40分後です。これが、実は神戸からの被害が出ているという第一報でした。防災関係者や消防関係者の人も、それを聞いて「これは普通の震度6ではない」ということがわかった。震度7は当時後で調査して震度7を測るということになってましてので、震度6というのが一番強い地震なんですけど。入江アナの電話報告が被害の第一報でした。

そのころにはお隣の柴藤さんのご主人が、四輪駆動車で近所を回ってきて、「住田さん、これえらいことになってるよ、下の方は」という。高台の上の人たちは。浜手の地域を「下の方」といいます。「下の方では煙も出てる」と言うんで、私は急遽また自分の家よりは高台に登って町を見下ろして確認しました。

町からは、7本煙が上がっておりまして、そのうち1つはおよそ3キロ離れているんですけども、炎が見えておりました。3キロ離れて炎が見えるというのは、相当大きな炎が上がっている。

この内容を7時18分に電話レポートをしました。

で、こうしてはおれないと…。東京からは何の指示も来ないということがだんだんわかってまいりまして、私は街に出ることにしました。

## 被災地の取材開始

ヒッチハイクで街に出ました。私を乗せてくれた若いサラリーマンは、普通の自家用車でトンネルを越えた北区の方から市街地に出てきました。途中の落石の間ぬいながら車で下りてきたわけですけども、彼は私を乗せてくれました。大変感謝しております。エス・バイ・エルという、住宅会社のサラリーマンでした。

彼は、NHKという腕章をつけ、手を上げた私の姿を見て、車を降りてきました。「NHKさん、これから三宮で会議があるでしょうか？」って言うんですね(笑)。僕は「よその会社の会議なんかかわからない」と言いかけたんです。みんなきょう会社に行かなきゃ、学校に行かなきゃ。と思っている。でもこのひどい状態じゃダメだ。その間でスイッチが日常なのか非日常なのかどっちに倒したらいいかわからないという、そういう状況の人になっていたんです。その後何人か、同じ状態の人に出会いました。

私は下心もあったものですから「きょうはもう会議なんてないですよ。JRも阪急も阪神も全部止まっているし、道路もダメらしいですよ」と言いました。「じゃあNHKさん乗ってください」って言って、彼は私を乗せてくれました。そして現場に向かいました。

私はいつも小さな携帯ラジオを持っています。これはぜひ皆さん持っていただきたいんですが、それですとテレビの音声を聞いていたんです。そのころまでには「阪神高速道路が倒壊した」という情報が入っていました。これは大阪のスタジオから7時10分ごろに宮田修アナウンサーがコメントしています。東京のスタジオは村上信夫アナウンサー、いま午前中のラジオを担当していますが、その2人が（東京大阪で）交互に放送していました。

「高速道路が倒れた？ これはどういうことなんだろう？」で、私は運転しているサラリーマンの人に「現場に行ってください」というふうにお願いしました。

途中私はローソンに寄って地図を買ったり、NTTに寄ったりするんです。

NTTも建物は無事でしたけれども、中身はグジャグジャになっておりまして、電話はつながりません。私がたどり着いた東灘区御影のローソンは、レジのPOSシステムが電源が落ちてダウンしているものですから、電卓で手計算で店長さんらしい年配の人と若い学生アルバイト君が一生懸命やってきました。もう飲み物と、食べ物はポテトチップスにいたるまで全部売り切れておりまして、私1人地図を買うと言ったんでみんな「は？」みたいな顔をしていました。

NTT前の公衆電話には、100人ぐらいズラッと行列ができて、私は「すみません、NTTの中もダメなんで、1本だけ東京のニュースセンターに電話をかけさせて欲しい」と言いましたら、みんな「早ようせい」という感じで「ええからやれ」というしぐさをされます。ところが最前列の方が「NHKさん、さっきから何度かけてもつながらへん」という。それでも、わたしはコインを入れるんですが、やっぱり公衆電話はその時はつながりませんでした。

その後NTTは、公衆電話は災害時には、コインを入れても戻ってくる、つまりタダで公衆電話を開放するということになりました。きっとその時は、コインがもう一杯になって詰まっちゃってダウンした、という状態だったんだと思います。

公衆電話はつながる可能性が高い電話です。ピンク電話はダメなんですが、それ以外つながる可能性が高い。ところがいま公衆電話は少ないですね。みんな携帯を持っているものですから、公衆電話を撤収してますが、あれは非常にいざというとき大切な手段です。

で、私はひきつづきヒッチハイクで、現場に着きました。

途中の道はあっちこっち地割れができておりまして、水道管が破裂して水が漏れているんですね。そして窓を開けますとガス臭い。家並は、全部少しずつズレているんです。何でズレてんだらうと思ったら、みんな1階がグシャッとつぶれまして、2階が前に倒れ掛かったり、横にもたれ掛かったり、そういう状況の家並がズーッと続いておりました。またマンションもところどころ、ちょっと傾いているんですね。「まさか」と思いました。ありとあるゆるものがちょっとずつ傾いているものですから、どれが正しいのかがわからなくなる。

この写真を見ていただこうと思います。これがたどり着いたところです。およそ650メートルに亘って高速道路の高架が倒れてしまいます。こっちが大阪行きの4車線、こっちが神戸行きの4車線なんですが、大阪行きの車線がアウトなものなんですから、こっちの交互通行になるんですね。

あらゆる法律というか法規というか、そういうものがもうみんな現場ルールになっちゃってまして、いつものルールではもう成り立たない状況でした。これは、その近くの橋脚なんですけど、このようにコンクリートが弾けて、鉄筋がグニュッと出て、「何でこんなことになってんだろう？」という感じでした。

この手前の三菱バジェロは、何でこうなっているかさっぱりわからない状態で放置されていました。とにかく一番北側の車線がダメでして、20台ぐらいのトラックがダメでした。運転台にドカンと、橋桁が乗っかってきてまして、下のタイヤの部分は非常にきれいなんです。皆さんプロのドライバーがちゃんと昨日の夜もどっかで整備して出てこられたんですけど、ここ（車輪の部分）は大丈夫なんですけど、運転台や荷台が全部ダメになってました。ダーッとオイルが漏れてて、遠くの方ではファーーンとクラクションが鳴りっぱなしで、とにかくありとあらゆるものが、これもダメか、あれもダメか、という感じでした。

道中、JRの東海道線が神戸市内で、高架がドスンと落ちてまして、僕はそれを見て「これは尋常じゃない」と思いました。「東海道本線は日本の動脈である」、と地理で習った、その東海道本線が、間違いなく目の前でブツッと切れてちゃっている。

たまたまこの高速道路の現場では、高速機動隊の白パイのお巡りさんが通りかかったんで、私は「どういう状況でしょうか？」と訊いたら、「見たらわかるやろ」って言われました。「何人かやっぱり人



写真は住田氏撮影（5枚とも）

が亡くなっていますか？」って言ったら、「3人までは確認したけれど、あとは数えきれないし、もう確認のしようもない。手のつけようがない」って言って、彼は次の現場に向かって行きました。

倒壊した住宅に火が回りますと、もう手がつけられませんか。消防も台数が足りないし、道路という道路がみんな倒壊した住宅で寸断されてますので、消防車もやってこないということで、もう燃え尽きるに任せるといふか、火は燃え広がったらそのまんまという状況でした。

これがJR東海道線の六甲道駅です。

これ実は駅の入口なんですけども、ここは高架の駅で、コンコースで切符売場が右側にあるんですが、ここもダメでした。ただ幸いここでは死者がなくて、後で駅員さんに訊いたら、たまたま柱の近くに駅員さんもお客さんもいたんで、柱のそばは大丈夫で、それ以外にドスンと落ちてきてたので、柱のそばは梁の部分がドカンと落ちてきててもこの辺にいと大丈夫という感じで、六甲道駅で亡くなった方はいなかったということでした。以上で写真は終わります。



## 日常と非日常のギャップ

とにかく私は被災地の中を行くわけです。

今度は電話を探しますけどなかなか見つからない。で、この高速道路の近くで何度も往復して、もう午前9時過ぎになってるんですけど、9時半ごろかな？ 空き地にトラックの運転手さんらしいおじさんがいて、窓から。受話器をひっぱりだして電話していました。

「あっ、その電話貸してください」って言うと、そのおじさんが「おう、(電話は)このねえちゃんの家」と言って窓の中を指します。すると窓の中では20代のOLって感じの女性がいました。平屋建てのアパートなんです。その中で彼女オロオロしてまして、鏡台だとか服を入れるタンスみたいなものとか、部屋の中で倒れてるんですけど、彼女は何にも手に付かない。「NHKなんですけど、ちょっと遠距離ですが電話貸してもらえますか？」って言ったら、「いいです、電話なら使ってください。で、きょうは大阪の会社あるでしょか？」。やっぱり同じこと訊くんですね。

とにかく、身体が無事な人の中でも、オロオロしてどうしたらいいのかわからないという人が被災地にはいました。

私はその電話を使って東京のニュースセンターにかけられるんですがなかなかつながらなくなって…。やっと東京につながりましたら、東京は「いま大阪放送局から全国ネット出してるんで、この時間は大阪放送局に掛け直してください」って言うんですね。

僕はもう「あほか」と思いました。「この混み合った中でやっとながったのに、掛け直せとはどういうことか」と。「もう2度とつながらないかもしれないけど、それでもいいか！」って言ったら、「申し訳ありません。大阪局に掛け直してください」(笑)って同僚のディレクターが言うんです。

「こらあかんわ」と。つまりそういうものなんです。被災地と、それが理解できない通常の地域の人とのものすごい落差。ほかの地域の人たちは「あ、電話掛け直して」、「あ、電車乗って行って」っ

てこういう感じなんです。「30分で行けるでしょ」って感覚なんです。もうそうじゃないわけですね。もうみんな孤立しているわけです。

僕は腹が立ったんで電話を切りました。

そのころラジオは別の放送を出し始めていたので、ラジオセンターに掛け直しますと、ラジオセンターはすぐに採用してくれました。

で、ラジオセンターに掛け終わったところに、「おいっ、電話貸さんかい！」って別のおじさんがやってきました。どうしたんだろうと思ったら「救急車呼ばないかん」と言われました。前の空き地には人だかりがしてて、「大丈夫か？」って言ってみんな真ん中に毛布にくるまった人に声を掛けてる。

そのおじさん曰く、近所のアパートからやっとう青年を引っ張り出した。日系ブラジル人の青年で、近くの工場に勤めてる。ちょうどその辺りは、この会場のある磯子と雰囲気が似ていて、浜手の方には工場があって、産業道路みたいなこういう感じで国道43号線、高速の高架が倒壊した道路があるんです。そのちょっと住宅街に入ったところのアパートから彼は担ぎ出されたといいます。腰の骨を折ってるらしい、すぐに運ばなきゃいけない。

彼は僕から電話を奪い取って「借りるで」って言って119番を何度もプッシュする。でも、「あかん！」とガシャンと切る。で「どうしました？」と、僕も119を掛けてみたら「ツー、ツー、ツー、ツー」という話し中の音がするばかり。いざというときの119が全然つながらない。

他人がイライラすると今度こっちが落ち着くもので、「それってもしかしたら皆さんが持ってらっしゃる、何か軽トラックかそういうのに乗っけて運んだ方が早いかもしれません」。すると、おじさんは「そうや、そうするわ」って言って走っていきました。

私がまた何度か電話でトライしている間に、〇〇工務店って書いたトラックに乗せてみんなが運んで行きました。

とにかく電話はほとんどつながらない。119もつながらない。そんな中で私は1日過ごします。

とにかく私も回線が繋がらなければ、つまり連絡手段がなければ、仕事ができない、何の世の中の役にも立たない人間です。

私たち放送局の人間は、電波に情報を載せない限りは単なる歩くおじさんで、何の役にも立たない。新聞社も活字にならないと新聞社の記者は何にもならない。神戸新聞も社屋が全壊指定になって、彼らも非常に辛い思いをするんですが、メディアの人間もこういう時、非力であります。

僕はもうこのままではダメだと思った。ラジオでテレビの音声を聞いてると、西宮市の甲子園まで、中継車が来ていると言うのです。例えば、横浜が酷い災害の現場となつてるとしますと、東京から川崎の辺まで中継車がもう来てるわけです。放送では、「川崎の辺りの高速道路は大変です」とかやってくる。「横浜はもっと酷いのにな」っていう状況ですね。

僕は、じゃもうそこまで行こうってということで、中継車が来ている場所までまたヒッチハイクで行きました。2台乗り継ぎました。1台は銀行員。「いつもなら3、40分で行くところをもう3時間もかかった」って、あせっている銀行の支店長さん。「鍵開けないかんのや」。つまり金庫の鍵を開けないと、地域の人がその日の資金繰りに困るって、彼は彼で必死なんです職業柄。彼はそれで東に向かっている。その人に途中まで乗っけて…。またもう1台、これは左官業をされている方で、「アパートがもうあかんねん。神戸のアパートがもうあかんから、大阪の知り合いのとこ行くねん」。家財道具積んで、持てるものだけ持って、小っちゃな軽自動車以西へ向かっている。「アパートでも1階の人が死んでな、もうあかんねん」って言ってその人もかなり気が動転してる感じでした。2台乗り継いでやっ

と中継車にたどり着きました。

で、その後何度も中継を出すことになります。

途中、東京からこういう指示が来ました。「甲子園の中継車どうぞ。甲子園の中継車、もう何度も先ほどから同じ情報なので、もう少し神戸の方に進んでから中継つなげてください」って言うんだけど（笑）。これもまた東京は何を考えてるんだ、と現場は怒ります。

もう渋滞は始まるは、電波を1回落としてつなぎ直すのにどれくらいかかるかわからないぞ、っていても「あ、もういいです。はい」ってこういう感じですね。つまり、いつもの中継の段取りです、東京は。「はい電波落として。次のポイント行って。じゃ電波立ち上げるのに何分でしょ。はいじゃ行ってください」みたいな感じなんで。こっちは「おい大丈夫か？」って感じですが、とにかくもう情報が限られてきたので、じゃもっと被害の大きいところへ行こうということで、さっきの高速道路の倒壊現場に戻るようになりました。

僕はここならいくつか情報があるっていうんで、ここまで中継車を誘導したんです。そこで夜の「ニュース7」のあたりまで何度か情報を出して、それで「1回休憩しろ。しばらく呼ばないから取材をちょっとしろ」ってことになりました。

先輩の佐藤誠アナウンサーと一緒に取材に回るようになりました。ここはちょうど芦屋市と東灘区の境あたりなんですね。で、近くのマンション、ちょっと傾いているマンションがさっきから気になっていたんで、取材に向かいました。

6階建のロイヤルマンションっていう名前の、築20年ぐらい経ってるマンションでした。そこへ行ったらば、1階がグシャッとなっていました。マンションは鉄の扉ですね。その101、102、103って並んでる扉が全部バーンと前にはじき出されて、さっきの橋脚みたいにコンクリートがグシャッつぶれて鉄筋がグニュッて見えてる。1階は天井が、人の腰ぐらいの高さまで落ちてる。

その前の駐車場で40代後半から50代前半ぐらいの女性が絶叫していました。その日に見た人はみんな同じ格好なんです。パジャマの上にジャンパーとか、パジャマの上のコートみたいな感じなんです。その人も、何か寝巻きの上に分厚いコートを着てた女性ですが、その女性が駐車場をぐるぐる回って、もう夜もとっぷり日が暮れているんですが、その髪の毛ぼさぼさの女性が、「誰か来てーっ！ 誰か来てーっ！ 誰か来てーっ！ 誰か来てーっ！」とずっと叫んでる。

ちょっともう精神的に参ってらっしゃるなというぐらい絶叫してる。「誰か来てーっ！ 誰か来てーっ！」。隣で30代ぐらいの男性がやっぱりパジャマにジャンパーっていう姿の2人連れの方がいらして、その2人はうなだれてる。訊いたら「6世帯がまだ埋まってて出てけえへんねん」っておっしゃって、「あかんわ」って感じなんです。

僕も2階から6階がドーンと乗っかってきてますから「これはだめだ」と思って目礼して「すみません」って現場を去りました。

力になれない、私たちは何の力にもなれない、と感じました。ただ情報を伝えるってことができるだけなので、メモにしてとにかく助けを求めている人がいるってことを伝えなきゃ、と思いました。

しばらくしてその周りを回りますと、今度は芦屋市の津知町というあたりは、昔からの木造アパートが多い地域で、そこはもう木の柱が組み合わさって絡み合ってるような倒れ方をしていました。ここも被害が大きくて、もう夜の9時ぐらいになってましたので、名古屋市消防局などちょっと遠方の消防から次々に応援が来始めていました。名古屋市消防局の、何か非常に場違いな梯子車が来てるんですけども、でもそれでもそこで消防の人が乗って照明のライト当てて少しでも何かやろうって感

じなんです。

そこでは、若い男性の声が「おやじー、おやじー、おやじー」やっぱり絶叫してる。埋まったまま出てこない。でも何かかすかに音がするので「がんばれーっ」っていう声を出している。朝の5時46分からですからもう12時間以上経ってる。まだそういう状況というか、やっとそういう状況というか。

助けを求めている人たちの声は何とも言えない声でして、私たちももう心に突き刺さるという感じでした。それをメモにしてまた次の中継にこれはもうぜひコメントしようと考えました。

またさっきのマンション通りかかると、もう絶叫していた女性もいないし男性もいなくてシーンとして、缶コーヒーの飲みさしが置いてあって、タバコがそこで消してあって…。やっぱりダメだったのかなと思いました。

翌朝は、また早朝から朝の9時台までひっきりなしに中継で呼びかけてきます。「それでは神戸市東灘区深江の中継現場です。住田さん」「それでは神戸市東灘区、住田さん」と、何度も言ってきます。

東京は相変わらず「高速道路のそばなので、交通情報をからめて1分半でお願いします」みたいなこと言ってくるんです。交通情報たつて、もう前の日のちょうど僕らが中継車を移動させるころからもうピタリと動かないし、交通規制もあって緊急車両以外は通さないと警察は踏ん張ってるし。でも絶対に肉親を助けるんだと言って解除されるまで俺は待つと言って並んでいる人たちのズラッと車が並んでいる。その間に緊急車両がもう埋まってしまっただけにちもさっちも行かない状態。

そんなところで、恐る恐る「すみません、あの一、ここに来るまで何時間くらいかかりました」と聞いて、どんな情報が得られるでしょうか。大阪と兵庫の県境からいつもなら40分くらいで来るところを3時間かかったといわれます。3時間かかってここにたどり着いて、さらに数時間待ってます、っていう人の情報を流すしかないわけです。何の交通情報にもならない。こんなだったらヘリコプターでダーッと中継してもらった方が早いと思うんです。

私はもう、東京のいつもの中継っていう概念に囚われている人たちにかかざらわっててもしょうがないと思って、交通関係のコメントさっさと済ませて、あとは建物の倒壊現場でまだ埋まっている人がいるということ、それから自衛隊の人たちや交通整理をしているお巡りさんがとにかく緊急車両を通して欲しいと言っている、っていうコメントを一生懸命流しました。

## 被災2日目

そうやっている間も、グラグラグラグラってまた余震がくるし。そんな中で2日目が始まりました。

で10時ごろになってまた東京が東京の論理で「もう別の中継ポイントしばらく呼ぶので、住田さんのところはもういいです。しばらく取材しててください」って言ってくる(笑)。ハイハイって感じです。

で、きのうのマンション行ってみたんです。そしたら、人垣ができてるんですね。もうよそのカメラが並んでる。名古屋から応援に来てる東海テレビとか、朝日新聞とか、ズラッと人垣ができてるんです。「えーっ？、どうしたんだろう」と思って行ったら、「生きて出てきたよ」と言う。

自衛隊と消防との合同の救助隊が来てまして、救助活動が始まっていました。

たとえば、101号室の家族を救助しようとしてます。リビングや玄関に寝てる人はいませんで、例えば和室、みんながここで寝るなって部屋に目星をつけます。その101号室の和室で寝ていてまだ出てこない人がいるとしますと、201号室に上がって、そこの同じ、大体上下階は同じ間取りですので、そこの同じ間取りの部屋の床をコンクリートカッターで穴を開けます。

この会場の天井を見て下さい、僕の真上に梁が通ってるんですけども、これがズドンと上が落ち

てきたなら僕はダメです、もう。ところが川手先生は助かるかもしれません。川手先生が前に飛び出して、この梁の太さのほんの数十センチの空間でペタッと横になりますと、上の天井が完全に落ちてきましても、ここに梁の部分だけ空間ができる。これを生存空間というんですけども、助かる人がいるんです。

で、たまたま僕が行ったときには、自衛隊の人が「救急車の手配！」って言っている。消防が「OK」って言って救急車呼んでくる。つまり、だれかが生きて出てくるということなんです。残念ながら亡くなっていると救急車はもう呼ばない。

「救急車！」って声がかかって、担架でおばあちゃんが運びだされてきました。90 いくつのおばあちゃん。ワーッとみんな取り囲んで「良かったなー」って、人垣も報道陣もみんな「良かった」。

で、知り合いらしい人が駆け寄って「おばあちゃん良かったねー」って言ったら、おばあちゃんは「寒かったー」って応えました。「せやけどおばあちゃん、がんばったなー、ようがんばった」と言われると、「暗かったー」って言った。

もう翌日の午前 10 時過ぎですから、27、8 時間経ってる。夜は零下になるぐらいの気候です。よくがんばりました。残念ながらそのおばあちゃんは、のちに亡くなるんですけども、とにかく生きて出てきた。

例えば僕の上に、こう僕が座ってたんすが倒れてくる、その上に天井が乗っかりますと僕の頭 1 点で支えることになりますので、僕はまずダメです。ところが隣にたんすが倒れてきて、そのたんすと床とのすき間に僕が伏せてますと、そこにドスンと天井が落ちてきても、僕はすきまで助かります。そこが生死の境なんです。

長田区歩いてますと、知らない女性に声をかけられました。「NHKさん、NHKさん、私怖い目に遭ったよ」って。被災地では、恐怖心をまぎらわそうと、どんな体験してきたか、知らない人にも話し続ける人が多かった。「私は寝てた、布団に寝てた。グラッと来たから上半身だけムックリ起き上がった。ドーンって何かと思って見たら、枕のところに隣の銭湯の煙突が倒れてきてた」。そう言うのです。

僕の知ってる別の学生さんは、残念ながら彼は隣の銭湯の煙突の直撃で亡くなってる。ほかの部屋は全部助かったのに。被災地では、命の境目は数十センチの差でした。

僕はその芦屋のマンションでもうひとつ思ったのは、「誰か来てーっ！ 誰か来てーっ！」って言ってた女性の行動の大切さです。

ここに誰かいるっていうところを、優先してみんな自衛隊も消防も回ります。ここにまだ人がいる、まだ生きてる人がいるんやということを手を上げて叫ばないとダメなんです。あの女性は僕は正解だったんだ、ああいう姿勢でないと人の命は助けられない、と僕は思いました。あの時「あかんわ」とあきらめた僕はダメでした。

まだまだ大混乱の中で 1 月 18 日になりました。そのまま僕は 2 月 11 日まで現場で緊急初動の仕事、もう休みとかそんなの吹っ飛びまして、仕事をしてました。

東京からやってきたデスクが「住田、おまえ勝手に動くな。こういう非常時はちゃんとデスクの言うことを聞け」とか言うんです。僕はめっちゃ腹が立ちました。「デスクが後から来たんやないか」(笑)。私もアドレナリンが出てカッカしていました。

でもまあ、とにかく通常を貫く人とエライ目に遭ってる人との温度差があって、すごいストレスです。この人にはわかってもらえない、っていうのが大変なストレスでした。

## どういう人が亡くなったのか

そのころには、メディアがいろいろ言い始めます。「災害弱者であるお年寄りがやられた」と。

確かに、お年寄りで亡くなっている人が多い。お年寄りは2階に寝かすより1階に寝かせて、火事のおきおばあちゃん、おじいちゃんは足が弱いからさっと逃げられるところに、と思って1階に寝かせている家庭が多かった。でも、グシャッとつぶれたのが1階が多かった。ですから1階で亡くなったお年寄が多い。

そんな中で僕は、若い人にも亡くなった人が多いと言う話を耳にして驚きました。

私は、震災4日目からは、神戸で取材しては、大阪放送局に行ってVTRを編集して、放送を出してはまた神戸に戻るというローテーションになりました。

移動手段は鉄道はダメで、道路もダメですので、船が中心でした。

きっと神奈川県も沿岸の皆さんは、船がすごく役に立つと思います。いざというときには、釣りに行かれる方はもしかして渡船や漁船関係の人と仲のいい方がいらっしゃるかもしれません。こういう方を仲間にとくといいです。東京や千葉の親戚や知り合いのところに脱出できる手段が確保できます。

そんな中で大阪放送局で編集中に、アルバイトをしている僕の大学の後輩が「住田先輩、ウチの応援団長亡くなりました。連絡の取れない学生もまだいる」というのです。「えっ？どうして？」。

若い学生は、倒壊しアパートなんか、かいくぐって逃げてるに違いないと思っていました。でも、学生街の安いアパートに住んでいた学生たちが、多くやられた。

神戸市灘区六甲町の西尾荘というところで3人、僕の大学の後輩が亡くなっています。古い町並みでして、アパートがいっぱい建っていました。そこで3人の神戸大学の学生が亡くなりました。地震直後にそのアパートは倒壊するんですけども、近くに商店街があって、これも古い商店街なんです。商店街は朝の5時46分といういろんな調理の準備ですとか、パンを焼く、豆腐を作る、いろんな準備でもう火を使ってるんですね。



で、倒壊した下宿に閉じこめられた学生たちが、炎に包まれて亡くなるという事態になりました。井口克己さんという方がのちに手記を書かれまして、友だちをこの西尾荘で亡くしました。この井口克己さんの手記を読みます。

炎につつまれていく西尾荘は、一生忘れられない光景だろう。当時・経営学部3年生だった井口克己さんは、親友の中村公治さんを亡くした。二人は同じ映画研究部に所属していて、同じ名古屋の高校出身。「僕は烏帽子町で、中村は六甲町にある西尾荘に住んでいてお互い近かったこともあり、すぐに親しくなりました」と井口さんは言う。あの日の朝「大きく揺れました。揺れがおさまったので外に出ると、家の向かいの木造の家の一階はほぼ全滅で、近くの烏帽子中学校は火事でした。とりあえず暗かったので明るくなるまで待って、午前7時ごろ名古屋の実家に電話で元気だと伝えました」

午前8時ごろ、中村の下宿西尾荘に行った。「もうどこかに逃げ出したと思っていたんですが、大家さんが『中村君はまだ中にいる』と言ったのであわてて向かいました。そこで見えたのは手だけ出ている中村の姿でした。体の上にはコンクリートの床、頭の上にはスキーに行くからと言って、貸した僕のスキー板がのしかかり全く動かない。僕はがむしゃらに中村の上にあるものをどけにかかったが、いっこうにちががあかない。そこに年配のおじさんがシャベルを持って現れ、手際よく作業を進めたんです。この時僕は、『よかった、中村を助けられる』とよろこびました」。ノコギリを使って梁などを切りのぞき、ほぼなくなろうとしているとき、外から『火の回りが速い、早く出てこい』という声が出た。「確かに火は迫っているけれどももう引っぱり出せると思いました。でも、僕が貸したスキー板が邪魔して動かないんです。もう間に合わないと思いました。僕はもっとも敬愛すべき友、中村を助けられませんでした」。

外に出た井口さんたちが振り返ると、西尾荘は炎と轟音とともに二階部分が崩れ落ちていった。「目の前で見殺しにしてしまった。こんなに悔しいことは今までではじめてでした。信じられなかった。『何で消防ははやくこないんだ』『神様はいないのか』。でも、もう中村は、帰ってこないんです」

同じ西尾荘で坂本君という学生も亡くなりました。中村公治君は経営学部の3年でしたが、工学部3年の坂本竜一君も亡くなっています。坂本君のお父さんの手記があります。読みます。

前日は、明石市大久保の私の家に来ったんです（編集注：お父さんは工場の勤務なので兵庫県の奥の方に住んでいらっしゃるんですが、隣の明石というところにお父さんは住んでた。神戸に息子さんは住んでた）。妹と三人で焼き肉を食べに行ったんです。就職の話をしました。「関東は地震があるし、生活にくいし」と言って、遠いところに私は行ってほしくなかったんです。

焼き肉食べて、ビールを飲んで、夜の9時過ぎに西明石駅に送って行ったんです。後悔しているのは、「泊まっていけ」と言わなかったことです。泊まっていたら、こんなことにならなかったんです。

西尾荘に駆けつけて、やっと大家さんに会えて、でも、「坂本さんの顔は見てない」といわれて、それで、「だめやー」と思って掘るしかないと思ったんです。会社の仲間と焼け跡を掘りました。同じ西尾荘の鈴木さんのお父さんとも出会って、鈴木さんのところも掘ったんです。掘ってたら……、骨が出てきたんです。

火の回りが速くて、助けようとしてもだめやった、ということは全然知らなかった。息子の竜一は「もうええから逃げてくれ」と友だちに言うたというんですけど……。そんなん知ったらしんどくてねえ。

今となっては腹立たしさが湧いてくるんです。今ごろ、どこかいい会社に決まって、いい正月しとると思うんです。あの野郎、どこかで遊びまわって、いつも親に連絡してけえへんと。そう思いたい。どっかで生きとる。学校へ行っとるんや。何年かしたら卒業するやろ。そう思うとるんです。

肉親を探し出す人という作業では、大抵は、まずその場所に駆けつけます。そこで、建物が倒壊していたり焼けていたりしていても、生きていることをみんな信じてます。皆さんまず近くの避難所に行かれます。避難所も大混乱で、「うちの息子来てますか」と言って、教室を訪ね回ったり体育館訪ね回って、「うちの息子いないか」って聞いてもいない。じゃあ近くの病院だということで、今度は病院に行くんですけど、病院の名簿どこの名簿見ても名前がない。

そこで、もう一度現場に戻ります。手の回らないところは倒壊したまんまです。放置されてるんですね、何日も。そこで必死になって知り合いと一緒に掘ったらご遺体が出てきたとか、焼けた場合には骨片が出てきたということで、皆さん対面される。そういう状況が、もう街のあちこちでありました。

当時の現場を私は見たつもりでしたけれども、もしかしたら、私はそういった現場を通りすぎながら、仕事をしていたのかもしれない。

実は消防や自衛隊の人も、心の傷をたくさん持っています。凄惨な現場を彼らは見えています。職業人ではありますけど彼らも大変傷ついていて、当時の話を聞くと忘れられない光景がいっぱいあると言います。

和歌山から応援に行った消防の人の話しですけれども、家の2階が1階を押しつぶした家で、1階の窓から上半身を窓の外に出したまま挟まれて亡くなってる方がいた、とか。あるいはリビングでコーヒーを飲んだ姿のまま、生き埋めになって亡くなった人がいた、と言っていました。

芦屋の消防の人が忘れられないとおっしゃってたのは、赤ちゃん。最初に消防署に来たのが赤ちゃんを抱いた若いお父さんだったと言います。「何とかして欲しい、助けてくれ」ってお父さんが訪ねて来た。残念ながらもう息絶えていて、「町は大混乱だろうから、ご遺体お預かりしましょうか？」って声をかけようと思ったときには、もうお父さんは、抱いて帰るところで、後ろ姿しか見えなかったって言ってました。

ある学生は、2階で亡くなった。電子レンジが飛んできて頭に当たった。ものが飛ぶんです。電子レンジも飛びます。

私の同僚の上田早苗アナウンサーは、芦屋の転勤先の旦那のマンションにたまたま休みでいたんですが、ベランダに足を向けて寝てたんです、布団に。そしたらベランダのクーラーの室外機が布団を越えて枕元まで飛んできてた、というんです。

ある大学の先生は、マンションで亡くなりました。マンション自体は崩れなかったんです。「このマンションは、無事で良かったなあ」って、周囲の人たちは言ってたんですが、弟さんが「兄貴と連絡がつかない」って訪ねてらして、部屋に入ってみたら本に埋まって亡くなった。本棚は、いっぺんに倒れてくるとすっごく重たい。

犬の散歩中に、がけ崩れて亡くなって何日も後で発見された人もいた。工場で夜勤で明けの早朝に、工場見回り中に天井のダクトが落ちてきて亡くなった人。鉛筆を持ったまま勉強中に亡くなった生徒。

助けて欲しい、けど助けられなかったっていう、ダメっていうか、そういうことが街のあちこちであつた…。

おそらく皆さんも修学旅行などで神戸に行かれる方いると思いますけれども、教えて欲しいって言ったら、何人かに1人はそういう思いを持っていると思います。いつもはねニコニコして、全然そんなことがあったなんて思えない人が、「実はなあ、震災のときなあ」って話になる。被災地、激震地ではそういう経験をした人が少なからずいます。

## 消防や行政の人たち

消防も警察もダメでした。動けない。消防の人に訊いたら「ファミリーレストラン状態だ」って言ってた。

つまり、隊員は、動ける隊員はみんな機材や消防車と一緒に。ひとり留守番して、そこに次々と「うちにも来てくれ」、「うちにも来てくれ」って言われるのだけれど、みんな出払って連絡もつかない。無線も飛び交って混信して。

「必ず後で行くから」って言って、一軒一軒メモを書いてもらう。ちょうどファミリーレストランで順番待つみたい、何丁目何番地のナントカさん、何丁目何番地のナニナニさん、おばあちゃんが埋まって、子どもさんが埋まって…。でも、為す術がない。そんな状態でした。

外に飛び出した消防署員は、こっちの角あっちの角で、「こっちにきてくれ」、「いや、こっちにきてくれ」って引っ張り回されてしまう。隊員が組織として動けば力になっても、1人ずつみんな引っ張られていっては力になれない。消防の組織も麻痺しておりました。

被災4日目の早朝に灘区役所に行きましたら、5人ぐらいの方ががんばって仕事をしていました。庁舎には大きなヒビが入っちゃってるんですね。この建物も次の余震で大丈夫かなって感じで、あっちこっち壁が裂けてるんですけども、そこの一画に「災害対策本部」と手書きで書いて机を置いていました。みんな暖房も効かないから、作業服にジャンパーみたいな姿で仕事をしていました。

そこはひっきりなしに人が来ます。翌日取材に行っても、同じメンバーがみな髭ボーボーになってがんばってる。「他の職員はどうしたんですか？」って訊いたら、みんな区役所の人も被災して、肉親を亡くした人や自宅が倒壊した人がいて、手が足りない。交代要員もいない、というんです。

そんな中、区役所のロビー、市民課とか〇〇課とかいろいろ書いてあるんです。そのロビーにズラって被災した人がみんな寝ていました。

夜明け方取材に行ったときに、目を覚まして壁にもたれて座ってる人がいるから「すみません、どうい状況ですか？」って訊いたら「届けを受け付けてもらえるん待ってんねん」って言う。指さした方をみてギョっとなりました。みんな雑魚寝してるから、寝てる人かと思ったら、寝てる人の一番手前のその人のそばのおばあちゃんには、顔にハンカチがかけてありました。あっ、この人は亡くなってるんだ。

隣でいびきかいて寝てる人もいる。ご遺体も避難してきた人も一緒なんです。窓口が開かない、機能しないから遺体の処理ができない、って状況でした。どうしていいかわからない。とにかく待つ。少しでも安全なところで待つ。

## 避難所になった学校は

そんな中で、学校はどうだったんでしょうか。

おそらく学校というのは生徒・児童そして教職員の安否を確認し、そして避難所を運営する、というのが基本だと思うのです。けれども、あの日は早朝でしたので、職員がいない、まあ警備員さんがいるとか、自動警備になってるとかそういう状態です。近所に住んでる先生がまず駆けつけます、自分の職場だから。行ったらもう、その前にワッといっぱい、正門の前や閉まった玄関に人が群れている、っていう状況の学校があったということです。

でもそれはいい方です。門を乗り越えて鍵を壊して中にワッと人が入っちゃってる学校もあった。

神戸市では神戸市立の学校・園のうち、幼稚園を含めてですが、63%が避難所になりました。なんだ6割ぐらいか、と思われるかもしれませんが、激しい被害のエリアは神戸のおよそ面積で言えば3分の1ぐらいですから、激震地の海沿いの学校はもうほとんど避難所。

でも、阪神淡路大震災では、1000以上の学校が被害を受けております。さっきの手記に出てきた鳥

帽子中学校では、2階3階が全焼であります。

そのほか建物全壊して一部焼失など多数であります。

「どんなところが避難所になるの？」ってよく訊かれます。この間も滋賀県の私立の先生方とお話してたんですが、もう公立も私立もなく、幼稚園も大学もなく、みんな人が押し寄せる。私が行ったところでは、民間の住宅展示場まで避難所になっておりました。バスの車庫も避難所になってました。バスにみんな乗り込んでました。

ネットを検索していただきますと「御影工業高校の震災100日間」というタイトルの記録が残っております（編集者注：2011年9月現在は[http://www2.kobe-c.ed.jp/kagi-hs/?page\\_id=254](http://www2.kobe-c.ed.jp/kagi-hs/?page_id=254)）

神戸市立御影工業高校は、現在神戸市立科学技術高校になっています。それを参考にして、どういふふうな流れになったかを見てみましょう。

まず避難者がドドッとやってきます。しばらくシーンとしているんですが、ワーッと人がやってきます。で、避難者の受け入れが始まります。

実はここで非常に大切なのは、どの教室にどんな人が入るかっていうのは、最初に整理がついてるとすごく助かる。「うちの息子いませんか？」「うちの親父来てませんか？」っていう人の問い合わせが後で殺到しますから、どの部屋に誰がいるかをちゃんと整理しておくとうごく助かる。「じゃあ、中原1丁目の人は3年のA組とB組に入りましょうか」って仕分けをしておくとうごく助かる。

それとあともう1つ、神奈川県立だからと言って、県からの指示が来るか？といえば、まず来ない。だってお役所もさっきみたいな状態ですから。阪神大震災のときは、行政は全く機能不全で、何の指示も来なかった。現場にいた先生の判断が重要でした。教頭や校長との連絡がなかなか取れない。

行政とか上司とかそういう命令系統・指示系統はほとんどマヒ。だから、こういうなかでとにかくたどり着いた先生が、避難所の開設を始めなきゃいけない。一日目は、大混乱です。

そうこうしているうちに、「県立何々高校に避難している人に救援物資送ります」と言って、いきなり大型トラックが来てドーンと物資が届く。

誰が配るのか、誰が整理するのか、何の指示もない。どうするの？

御影工業高校の場合は、2日目の午後10時にようやくみんなに配給しようという体制が整ったと記録にあります。つまり、ほとんど2日間は、大勢の人が避難して来るは、救援物資は積まれるは、で何にもできないという状況が起こってる。

続いて、やっとながら始めた電話が、ひっきりなしに鳴り始めます。「うちの親戚いませんか？」「うちの家族が避難してませんか？」という問い合わせ。何時間も、何十回何百回もかけてやっとながったという電話で、勢い込んで訊かれます。

それからあっちの教室でトラブルがあるらしい、こっちの体育館でトラブルってるらしい、という事態が発生する。見回りに行ったり、仲裁に行ったりしなきゃいけない。

そうこうするうちに、「ボランティアに来ました」という人が来るで訪れます。ボランティアをどう受け入れてどう働いてもらうか。今でこそ、地域の社会福祉協議会が一括でボランティアを受け止めて、そして配分してくれます。「あしたは何人ボランティアが必要ですか？」みたいなやり取りができるようになってきましたけれども、それでもおそらく初日2日目ぐらい大混乱だと、それは成立しないで、飛び込みのボランティアさんも来るでしょう。

そして大変恐縮ですが、マスコミへの対応が生じてくる。「すみません、中継車横付けしていいですか？」「カメラ入ってもいいですか？」。

次に、情報収集しなきゃいけない。「隣の〇〇中学では〇〇が配られてるらしい」、「市役所で配ってる言うけど、何でこの県立高校で配ってくれないの」みたいな話になってくる。つまり市が何を発表したのか、県が何を発表したのか実はラジオとかテレビで先に伝わっちゃう。

こんなことが実際にありました。「雨が近づいている。ビニールシート配ります。それぞれの避難所に配ります」っていう発表を先に県でされちゃう。この情報はすぐにメディアに流れます。すると、「いつビニールシートが来るんですか？」という問い合わせが職員室にみんな来るわけです。ラジオやテレビはモニターしておいたほうがいい。

体制が整ってきますと、避難所を運営している側から情報を伝達することが大切になってきます。「A組教室にはその話が伝わってるけど、B組教室には全然伝わってないじゃないですか」みたいなクレームも来ますから、一斉に公平に学校内に伝えなきゃいけない。ま、その頃には電気も復旧することでしょうから、放送であるいは掲示で伝えなければなりません。目の不自由な方、耳の不自由な方もいらっしゃるので、音声だけじゃダメ。書き物と音声と両方でっていうリクエストが来ます。

それからあと病人、ケガ人の対応。初期は、ケガをしてたどり着いた人をどうするかの対応ですけども、2日、3日と経ってくると「腎臓が悪いおばあちゃんが体育館に避難しているんだけど、透析に連れてってあげなきゃいけない。どうしたらいいのでしょうか？」ということになってくるわけです。そういう病人やケガ人の対応。近くのお医者さんが、あるいは地元の医師会が、保健室借りてそこでケガに手当てとか病気の手当てやろうって言って、そういう申し込みがくることも多いんですけども、そのときにサッと保健室を開けてどう対応するかですね。

冬時ですとインフルエンザが広まりますので、そういった人たちをどうするか。中越地震のときには、車で避難して来た人がエコノミークラス症候群で亡くなったっていう問題がありましたね。体操などのリフレッシュをやらないと、突然肺に血栓が詰まって倒れる、みたいなお年寄りが相次いだりしたら大変なことになります。みんなで身体動かすことしようという指導も必要です。「健康大丈夫ですか？」ってチェックしなきゃいけなくなってきました。

それから何週間も経ってくると「先生もうそろそろ子どもたちの授業してくださいよ」みたいな圧力がかかります。

避難せずに家で暮らす家庭からも、「学校行かなくてもいいの?」、「もうええかげん学校に行けよ」見たいな感じになってくる。また「先生どうしてくれるんですか、もう受験近いのに」ということも…。阪神大震災の時も受験直近でしたものね。

避難所でも日中、大人は自宅の整理とか、あるいは何時間もかけて出勤して、誰も面倒を見ることができない子どもたちがいっぱいいたりする。じゃあその子たち相手に、ボランティアの大学生のお兄さんお姉さんに、ちょっとした授業してもらったり、本読み聞かせしてもらおうとか、そんなことも始まります。

あと、お風呂の準備が必要です。自衛隊が設営してくれて、お風呂を湧かせるようになった学校が多かった。テント建ててね。じゃあ薪をくべてお風呂を焚く係が必要です。

それからお弁当配る係、掃除する係、トイレ掃除する係をどうしよう？

トイレが大変でした、これが。水洗トイレですので、水が流れれば押し流してくれるんですが、停電になった途端、ポンプの組み上げが止まって、水が来ない。人間我慢しきれずにみんな排せつしに行きますから、「後はもう知らない」、見なかったことにして用だけ足してしまいます。

灘区のある小学校では、いいアイデアで乗り切りました。近くの小さな川に土嚢を置いて水をちょ

っと溜めるんです。川岸からバケツを紐で降ろして、水を汲んで、トイレ横の子ども用のビニールプールに水を貯めとくんです。その水でバケツに一杯汲んで、流します。そのあと川べりまで行って新しい水一杯を汲んでおいてください、という具合です。このシステムで、その小学校は非常に衛生的でした。

水は大切です。**近くの川や井戸の水がどこにあるか知っていることも大切でしたね。**

こうした避難所の運営をどうするか。今話したのが全部先生がやるかってとてもできませんので、避難してきた人たちと協同で避難所運営ということが始まります。

御影工業高校の場合は、その運営組織が4日目の朝に成立したと書いてあります。今は皆さん心得てらっしゃるので早く立ち上がると思いますけれども、地域のリーダー的な存在の人が欠かせません。体育館の代表者は誰、新館の代表者は誰とか、教室・クラスごとに代表者を決めてみんなが集まってもらって、じゃああしたのお風呂はどんな順番どんな人がとか、あしたの朝の弁当配りどうするとか、トラブルが起きたらどうするっていう、そういう避難所の運営を自主的にやってもらって、施設を使うアドバイスなどを職員室の先生がやる、という形が各学校で始まりました。

食事の炊き出しは、御影工業高校ではちょっと早くて3日目の朝に始まったと書いてましたね。

大人同士だとなかなか大変ということもある。私の強い人、カリカリする人、我慢できない人いっぱいいて。

で、ある学校では児童や生徒を前面に立ててやったと言っていました。児童や生徒が「ここをいつも使ってるのは児童・生徒ですよ」。みんな「そうや、子どもたちのもんや、この学校は」と言います。「じゃあ児童・生徒に集まってもらって、どんなルールにするか決めてもらいましたので、大人も従ってください」って言ったら、「よっしゃ！」ってことになる。子どもたちもこういうとき役割を与えるとすごくいきいきするので、子どもたちがリーダーシップを取る形にするってことも1つの方法だ、と記録にあります。

学校でそのように運営の自治組織ができた時期は、当日から4日目までで20%だったそうです。5校に1校ですね。そして9日目までで43%、15日目までで49%。

ということは2週間経ってもまだ統制がとれないという学校があったってことです。はい。

## 2週間経って

わいわい言いながらも、最初の2週間ぐらいはみんな、助け合いの精神で溢れています。ああ、人間こんなに美しかったんだな、捨てたもんじゃないなっていうぐらい、最初の1週間から2週間ぐらいはすごくみんな協力的です。

ところが、1週間すぎ10日過ぎ2週間過ぎたころから、みんな「もっとより善くしたい」、「他所の方がいいらしい」、「何でここはこんなに環境が悪いのか」みたいにだんだんなってくる。そういうときにどういうふう運営して行くか、ってのがすごく大切です。

これと並行して、学校によっては遺体の搬入が始まります。最初はみんな雑魚寝している間にご遺体があるんですけども、やっぱりこれじゃご遺体も気の毒だしみんなも辛かろうということで、理科室に集めようって言って理科室にズラッと並んだ学校があったり、体育館の横の武道場が遺体安置所になったり…。

遺体も何日も置いておけない。「どうするんですか？」っていくら区役所に言っても何の反応もないっていう状況がしばらく続きます。すると、突然「棺を持ってきます。受け取ってください」と今度

は棺が届きます。

御影工業高校で遺体の搬入について、正式に行政から依頼があったのが3日目の午後とあります。

棺の材料がドッと送り付けられてきて、もう間に合わないから、区役所の人と避難所の人みんなで棺を組み立てたという学校もありました。

避難所となっている学校のある地区に、避難勧告が出るという追い討ちがかけられたところもありました。

震災2日目の未明に東灘区の南半分、天然ガスの工場からのガス漏れの恐れがあるというので避難勧告が出ました。言ってみれば「磯子区の海岸側は全部避難せよ」みたいに、いきなり来るわけです。せっかく避難所を運営し始めたのに。「えーっ？」みたいな感じですね。幸いにもそれは後で解除されました。

学校のすぐ裏手まで炎が迫ってきたってところもありました。その中で余震が何度もあります。

内なる混乱とトラブル、そして肉親を亡くした辛さを抱えながらも、外からは容赦なく余震だとかさらに避難勧告だとかが襲い掛かってきます。隣の小学校がやっぱり建物がダメなので、こっちと合流させてくださいといって隣の避難所の人が入ってきたりとか、もうとにかく大混乱がこれでもかこれでもかと続くわけです。

## もし学校で児童・生徒が被災したら

阪神淡路大震災のときには、発生が午前5時46分でしたけれども、いつも早朝に地震が起こるとは限りません。どんなときに災害がやって来るかっていうのはわからないわけですね。

早朝や深夜の場合には、先に避難者が入ってくる。そのあと児童・生徒の安否の確認をする。これが阪神淡路大震災の時のパターンでした。

ところが、登下校時に起きたらどうなるか。生徒や児童の安否確認するの、どうするのって言う間に、避難の人がドッと入ってくる、ってことがあります。

日中、児童・生徒がみんな学校の中にいるときですと、そのまま児童・生徒をまず安全を確保しながらキープするわけですが、そこにしかし避難の人がドッと入ってきます。児童・生徒を今度どういうふうにするのかってことになります。

高校ぐらいになりますと遠方から通学している子もいます。橋が落ちた、鉄道が止まった、トンネルは通れないってなったら、隣接の地域へ帰せないってことになってくるわけですね。学校内で滞留するという生徒たちも出てくるでしょう。

神戸の場合、昭和13年に阪神大水害がありました。谷崎潤一郎の「細雪」で出てくる大水害です。学校に子どもたちがいる最中でした。1934年（昭和9年）の室戸台風の時、子どもたちが学校にいる最中に高潮、暴風に襲われました。たくさん子どもたちが学校の倒壊で亡くなるんです。

ですから、学校にいる最中も何があるかわからないってこともありますね。

沿岸部の学校の場合は津波のときにどうするかも考えておかなければなりません。南海・東南海地震などに襲われた場合、和歌山の辺りでは、鉄筋コンクリート造りの建物の3階以上とか4階以上に避難せよ、ってことになってます。屋上をパッと開け放って屋上に避難させるってこともしなきゃいけない。地域の人でもドッと来ますからね。沿岸部だと、そう言うことも考えなければいけません。

そのほか避難所の課題としては、プライバシーが保てないという問題が必ず生じます。段ボールで仕切りをして着替えたり、女性などは布団の中で着替えたり。そんなふうみんなプライバシーを保

てないまま着替えをしたりとかですね。あと遺体の尊厳をなかなか保てないとかですね。

乳児、幼児、障害を持った人たちが泣いたり、パニックを起こしてまったりする。家族はみんなに迷惑かけるんじゃないかと思って、すっごくストレスをためることになります。

医療機関への通院できなくなったお年寄りもいます。そんな人たちをどうするのか、ということも抱えながら、避難所運営は動き始めるわけですね。

## 日ごろの備え

日ごろの備えとしましては、地域・近隣企業との日ごろからの連携というのも非常に大切です。

学校の先生3人たどり着いて運営が始まるんだけど、それだけではとても無理なので、例えば同じ地域に住むけれど他所の学校の先生にも応援に来てもらうとか、あるいは地域の自治会の会長さんとか副会長さんと仲いいと「おっ、頼むわ」っていうそのひと言でじゃ何人か、人を出そうってことやってくれます。あるいは近隣に企業がある場合には、結構若い人たちがそこで働いている場合があるので、近隣の企業とも連携保つとすっごくスムーズに行くことがある。

それから食料、飲料水、毛布などの備蓄もどれぐらいしているのか。一般家庭ですと、ライフラインが止まっても3日ぐらいは生きて行けるように、ペットボトルの水や、長期保存の食料を用意なさいと言われます。(編集注：東日本大震災以降、1週間以上の備蓄を求める声もあがっている)

学校でそれは無理かもしれません。みんなが各家庭でそれぞれキープして持っているけれども、学校でもしかし、なにがしか備蓄は必要なのではないでしょうか。

それから防災のための資材や機材の配備も大切です。御影工業高校には工業高校なものですから、バールを貸してくれとかジャッキを貸してくれって言って、近所の人たちやっぱり助けを求めに来るんですね。いざというときには閉じこめられた人、学校の中で閉じこめられるってこともあるわけですから、そういった資機材もあるかどうか。

そしてトイレの確保。近くの水源は、といったことも学校では考えなければいけないでしょう。

兵庫県では震災学校支援チーム「EARTH (アース)」という組織を、高校の先生方が立ち上げました。兵庫県内の公立高校の教諭や事務職員、栄養職員、カウンセラーで構成されまして、何かあったら被災地からの要請で学校の復興支援に派遣する、という頼もしいチームです。新潟県中越地震、同じ2004年の台風23号のときには、いろんな他の府県にも派遣されました。また研修会もやっているということですので、もし興味のある方はぜひ声をかけてみてください。

(<http://www5a.biglobe.ne.jp/asahori/earth.htm>)

## 被害を小さくするための心構え

私は「大切なのは想像する力だ」といつも申し上げます。

東京勤務のときは、早出勤務が多く、午後の2時ごろになりますと、渋谷の放送センターから歩いて、東急ハンズの前を通過して、渋谷の駅にさしかかります。年がら年中、学園祭みたいな雰囲気ですね、若い人がゾロゾロしてますね。

僕はある日の午後、帰ろうとしてましたら、駅前の雑居ビルでモヤーッと煙が出てます。若いカップルが「何？あれー。けむりー、やだー。」とか言ってるんですけども(笑)、僕はやじ馬根性というか、仕事柄、(火勢が)大きくなったら大変と思って走って見に行きました。

1階から2階への階段が外に面してありまして、上がろうとしたら2階は大騒ぎであります。コックさんとかウエイトレスさんが、「こっちー!」、「みずー!」、「ホース!」とか言って大騒ぎしてました。厨房から火が出ているらしくて、そこから煙が出る。中は結構濃い煙です。それが外にうっすら出てる。

そうこうするうち、私の後ろに消防隊が着いて、「どいてください!」という事態になったんで僕はサッと退いたんです。

ところがどうでしょう、1階の布地販売の店の店員さんたちは外に出て見上げながら「何?これ」とか言ってにやにやしてるんですね(笑)。

僕は2階の光景をさっき見てますからね。こう言いました。「ちょっとちょっと、大変ですよ。消防車がいっぱい来ましたが、もし上の階に放水されたら、おたくの布地は全部ダメになりますよ」って。おせっかいかもしれないけど言ってあげたんです。

そしたら彼らはパッと顔色が変わって「2階手伝わなきゃ」って走って行くわけです。

つまり、次にどうなるっていう展開を頭の中で働かせないと、もうすぐそばまで自分の財産や生命のピンチが迫っているのに、「やだー」とか「なにになに?」とかっていう状況なんですね。

何でその人は死んだの? なぜ、ここで死んだの? っていうことは僕は絶対伝えていかなきゃ行けないと思う。

僕は以前、鳥取放送局に勤務していました。鳥取も昭和18年に直下型の地震があって、やっぱり家が崩れ大きな被害が出ました。

鳥取勤務のときに、僕は「鳥取大地震から〇年」というニュースの企画リポートを作ったんです。鳥取地方気象台から、1枚の写真が出てきました。噴砂現象、液状化の写真ですね。砂が吹き出た跡があって、鳥取平野はやっぱり危ない、液状化現象に備えよう!という企画を作ったんです。そのとき使った資料写真は、1階がグシャッとつぶれて、2階が街道筋にドッとせり出して、家並みがガタガタになってしまった様子を写した写真なんです。

あの朝、僕は神戸の町並みを見ながら「どこかで見た光景だ」と思った。鳥取で昭和18年に起きたっていう、同じ直下型の地震の時の写真とそっくりなんです。

でも僕の心には鳥取の教訓が全然伝わってなかった…。

後年、僕は鳥取局にいた年配のもう退職したドライバーさんに会ったら、こう言いました。「あのとき〇〇女学校が倒壊したんよ。あわてて飛び出した人は助かって、中で柱にしがみついた人は亡くなったんじゃ」。

これは、大変印象に残りました。

つまり、ここで、どういうふうになくなったかということを知っていれば、鮮明に記憶にプリントされます。そして、いざというときに、どう行動すればいいのか?などという方に頭が働くんです。

「〇千人の方が亡くなり、〇棟が消失しました」という数字だけでは、全く心に届かない。自分にピンチが迫っても「やだー、何?」とかって言うだけの人間になっちゃうわけですね。

なぜ人はここで亡くなったのかっていうことを知ることは大切。いざというときの行動に役立つのではないのでしょうか。それを知ることが、次に、「あっ、ここでこの人が亡くなるかもしれない」、「このまま中で閉じこめられていると危ないかもしれない」、じゃあどうする? 「誰か来てー!」と言えるんじゃないか。

だから、こういう場では、私は手記を、必ず震災の手記を読むことにしてるんです。

小学生の前でもこの手記は読みます。小学校の先生方からはちょっと残酷すぎるんじゃないかとか、生々しすぎるんじゃないかっていうふうに言われるんですが、僕は小学校3・4年生ぐらいになるともう感受性はあると思うんです。

日本では直下型の地震、あるいは遠い海の底で起きる大きな地震が、必ずまたやって来ます。私が生きてる間にはもう遭わないかもしれない。でも私たちの子どもや孫や、皆さんが教えてらっしゃる生徒さんが生きてる間には、出くわすでしょう。

まだ調査の済んでいない活断層はいっぱいあると言います。ある人が「僕が住むなら福岡だよ。福岡には活断層がないからね」って言った直後に福岡県であの地震でした。

つまりどこに来るかわからない。必ず誰か死ぬ。でも、その人を1人でも減らせるかもしれない。

震災で被害を受けた人たちにいろいろお話を聞きますと、やっぱり目の前で助けられなかった、助け出したけどダメだった、っていう体験が、すごく辛い思い出になっています。同じ地域で、同じ職場で助けられない人がいたっていうのは、深い心の傷になっています。みんな黙って言わないけども…。

ですから、亡くなる人、あるいは大けがをして障害が残るという人を1人でも少なくするためにはどうすればいいのか、っていうことをぜひ考えたい。亡くなる人はいても、1人でも減らそうということです。

そのためには、さっきも言った、「想像する力」が大切。

そしてもう1つは、「AがダメならB。BがダメならC」ぐらいまで考えておくこと。「何で電話つながらないんだー！」って言って、そこで立ち止まっちゃうことのないように。いざというときには「これは非常事態なんだ」と、パチンッとスイッチを倒せるように、シミュレーションしておくことです。

校長が来ないけどこれは決断しよう。県は何にも言ってこないけど、これはうちの学校で判断しよう、という緊急のスイッチを速やかに倒す。「きょう会議あるのでしょうか？」って迷っていちゃダメ。パタンと倒さなきゃいけない。特に地域の学校を守ってらっしゃる皆さんにはそれをお願いしたいと思います。

以上私のお話を、ちょっとオーバーしましたけども、ここで一旦ピリオドを打ちます。きょうは、どうもありがとうございました。

## 《質疑応答》

**【質問】** どうもお話しありがとうございました。地震で家屋が倒壊すると、そのときうまく助かった場合は火事を避けるのが非常に重要だと思います。阪神大震災のときに、タバコの火の不始末で火事になったということを新聞で読んで、腹が立ちました。引火する原因、火事を避ける方法をわかる範囲でお聞かせください。

**住田** これは詳しくは消防のデータなどを検索してみたいですけれども、まず最初に申し上げたいのは、「地震だ、火を消せ」というのが呼びかけマニュアルの第一番目にNHKも来ていたんですけれども、揺れてる間はまず自分の身を守ってください。揺れがおさまってから火を消してください。

さい、っていうふうにマニュアルが改められました。これは東北や北海道の冬場の地震のときにあわてて火を消そうとしてコンロに掛かっているお湯を被っちゃたりして大やけどをした人がいるので、まず「地震だ、火を消せ」は「地震だ。身を守って、揺れがおさまってから火を消せ」に変わりました。あわてて火を消すとかえって危険ということになったんです。

確かにあの震災では火災が発生しました。僕はタバコの火というのはちょっと聞いたことがなかったんですが…。

工事現場で大火災が発生したことがあります。それは工事現場のガス工事をしている人が、ガス漏れしてるのに、暗くなってたんであわててマッチで火をつけちゃって、ドカンと爆発したことがあります。大変重い過失だということで、厳しく罰せられましたけれども。

ガス臭いんですよ、地震の被災地も。それなのに懐中電灯つけちゃったり、火花が出そうなものをつけようとしがちです。これはすごく危険です。だからガス臭いときにはとにかくロウソクはダメだし、火花が出そうなものはちょっとやめとこうという考えが重要ですね。

それより、震災で大問題になったのは、「通電復旧」の火災なんです。地震で建物が倒壊します。そのまま、家を離れてみんな避難所に行きます。その後、電力会社は必死になって電力の復旧に努めるんですが、そうしますと倒壊した家の中に電流が流れます。そして火災が発生する、という火事が各所で発生しました。

原因として非常に目立ったのが熱帯魚のヒーターでありました。これは後に、加熱したときには、電機を遮断するしくみの付いた熱帯魚ヒーターがかなり出回っているんですが、それでも安いヒーターにはそれが付いてないそうです。これは要注意です。学校でもそういうポンプやヒーターを入れているところあるかもしれませんが、それ要注意です。

私たち放送局は地震の直後の呼びかけマニュアルに、「なお避難するときにはブレーカーを落として避難しましょう」というコメントを加えました。

電気ストーブなどは転倒したら底面のスイッチが働いて、電流が流れないしかけになってるんです。ところが、その倒れたストーブにさらにものが落ちてきてスイッチが入っちゃうことがあるんですよ。だから、とにかくブレーカーは落とそうというのが鉄則になりました。

それと、初期消火は大切です。小さな火のうちで消そうということです。長田区のある地域では、小学校の避難所に「何々地区に火が出た」って伝わると、下町なものですから青年団が呼びかけてウワッと避難所の人たちで動ける若い衆がその地区へ一斉に消火に行きました。みんな持てるだけの消火器を持って行って、初期消火して消し止めたって地区があるんですよ。後で消火器の数を数えたら100本以上あったって言うてましたけど。そういう小さいうちにみんなの人海戦術で火を消そうっていうのは確かにアリだっていうことです。ただし二次災害には遭わないでください、と専門家は言います。無理して助けようとしたり、無理して火を消そうとそうとして火につつまれたり、余震で建物が倒れてきたりして、二次被害に遭うということがないように気をつけて欲しいということですね。

**【質問】** 神戸の地震があつてから、僕ら高校の教員もおざなりな防災教育しかしていません。その後兵庫県でどういう取り組みが行われているのかがわかるサイトなどを教えてください。

**住田** これは他社のことではありますけれども、読売新聞と読売テレビと神戸大学とが共同でビジュアル教材を作りました。DVDです。当時の映像と新聞記事とデータとでそういう教材を作りました。

これを問い合わせてみてください。これは結構当時を体験できる資料、見える資料です。特に子どもたちには、ビジュアルというのは訴える力がありますので、そういったものがあります。

兵庫県の先生方も実は困っていて、語り継げない難しさがあるんです。若い先生たちの中には、当時、地震を体験してない人がいます。他所から来たりした先生が。ところが生徒の方が体験しちゃったりしているわけです。教えずらいんです。それと生徒がフラッシュバックを起すので、でなかなか教えるのが難しい。

なかなか神戸や兵庫で、これという定番は僕は聞いてないです。ただその現場を訪ねて行ったり、当時の人たちにお話を訊く。それからあと「人と防災未来センター」という施設があります(<http://www.dri.ne.jp/>)。

大きなジオラマもあって、当時の資料もいっぱい保存してあって、語り部の人たちもいて、そこへ行けばいろいろと体験できます。

僕が、個人的に大切な防災学習だと思うのは、アウトドアです。あの時、アウトドアに強い人は、例えば校庭で穴を掘って用を足そうとか、生き延びる力があつた。

どのトイレも詰まってしまつてみんな我慢しちゃうわけ。すると便秘になつちやつてみんな体調を崩し始めるんです。下水のマンホールのフタを外して板を渡してまたいで用を足せばそのまま流れる。その周り囲いを置くとプライバシーも保てるということを開発した人がいる。最近の防災対策の施された公園ではそういうキットが最近組み込まれてきています。

それと、僕は堺市に住んでるんですが、一部の地域の公民館などに、炊き出しのセットが置いてあります。大きな釜、ガスがダメならどうするってことも考えなきゃいけないんですが、すぐに炊き出しができるっていうキットを置いておいてあります。

ある防災対策が“ウリ”のマンションで作つたのは、防災ベンチがあります。ベンチの天板をガバッと外すと、ちょうど囲炉裏のようになっていて、大きな鍋を置けるコンロみたいになっているんです。下に廃材でも何でもいいから薪を入れて焚けば、お湯が沸かせます。そういった生きる知恵がアウトドアの知恵ですね。

どうやって生き延びるか、の知恵は大切です。水が止まって電気が止まってガスが止まってさあみんなどう生きる？ っていう「防災サバイバルお泊まり」をやっているところもあります。

**でもネットを検索してみると、もっといっぱい事例が出てくるかもしれませんね。**

あの時辛い経験をしたいろいろな人たちが事業を起しましてね、停電になつても長く光る蛍光塗料を開発して、真っ暗な中で矢印がずっと見えるようにするとか、もういろんなアイデアグッズがある。ベンチャーを起して、防災グッズ作ろうって言っている人が、たくさんいる。これも探してみるといっぱいあります。

年に1回防災訓練やつてるって学校ありますか？ まあやつてますね。僕は静岡が先進県なので、静岡はさぞかし素晴らしいだろうと思っていました。ある静岡県内の町に行って、そこの地元の5つぐらいの高校の代表に生徒が出てきて、パネルディスカッションをやつたんです。控室で打ち合わせをしたんです。で、その生徒たちに「ねえねえ防災はどう？ほんとのとこ聞かせて」って言つたら、「かつたるい」(笑)、「毎年同じ」、「役にたたねえ」とか言つてましたね。静岡でさえそうでした。

参考になつたのは、そのパネルディスカッションのときに会場の中学の先生からの事例報告で、防災訓練に必ず想定外を組み込む、という話でした。

例えば、防災訓練では、「A組とB組は西階段から降りる」って大体手順が決まつてるんですね。と

ころが西階段に先生が立って「この先崩れてるからダメだ」って言うんですよ。そしたらどう動くかっていうことですね。あたり前ですけど、違う階段を使用することになる。そうするとそこにみんな殺到して団子になるわけですよ。で、これも無理するとケガ人が出たりしますけれども、そういう形で想定外のことをすると、避難訓練もためになるというのです。ある先生は発煙筒を焚いたって言ってました。でもね、みんな何食わぬ顔をして発煙筒の横を歩いて来るわけです（笑）。つまり「だって西階段降りろって言われたんだもん」という具合です。

想定外のことやってみると、意外や意外「ああ、こりゃいかん」ということになるので、ケガのない程度、無理のない程度に想定外の訓練をやってみるのもいいかもしれません。

あと、地域で防災マップ作るという地域が最近多くなっています。漫然と防災マップ作ってもだめだっていう説もあるんですけども、「一体どうやって逃げるのか?」、特に津波の被害が予想される地域などでは重要です。津波は一刻を争うんですよ。避難路はどこがあるか知っているかどうかは、生死を分けます。AがダメならB、BがダメならC、CがダメならDと考えておかないといけません。それでもダメなら高い建物はどこか? 屋上の鍵はどこ? 外階段はあるの? っていうのを全部確かめとかないと命に関わります。

**【質問】** 私は2週間ぐらい経ってからお風呂のボランティアに行かせていただいたんですが、そのときすごく疑問に感じたのは、その周辺で、もうサウナか何かやってるんですね。そこで受け入れれば風呂のボランティアはいらないし、学校にまだ避難している人がいるんだけど新築のマンションはガラガラなんですよ、無傷で。これは私権の制限という問題があって非常に難しい問題なんですが、一時的にそういうところが何とかならないのかと素朴に思うんですが、いかがでしょうか。

**住田** 確かにね、アンバランス、不公平っていうのが緊急事態の中でありました。私の母校の神戸大学も避難所になったんですけども、国際文化学部の2つの体育館が全部避難所になりまして、これは底冷えの体育館でした。一方、農学部の方に避難した人は、学部長室の並びの同じフロアの、温かい、電気が来ると暖房が入るような部屋が避難所になって、「ここは快適です」なんて話があったりして、すごいアンバランスがありました。

民間も結構受け入れてくれたのも確かで、岡山の観光バス会社は、車庫のバスに避難してきた人を受け入れました。食品会社のハウス食品は、「六甲のおいしい水」を売っているんですけども、神戸市灘区の阪急電車の高架の横で当時、井戸を掘っていたわけです。いまはまた違う郊外の井戸をつかっているんですけど。この会社が「どうぞ水を使ってください」って言って、工場を開放しました。

「地震後、保健所のチェックを受けていないので、飲み水には使わないで欲しいけど、洗濯とかそれ以外の水なら使っていい」って言って「どうぞ持ってってください」って開放した。民間も結構やってくれた。

広い心で対応してくれたところがあり、ちょっと不公平もあったりするんだけど、おしなべて「我慢しようや」の世界に、震災直後にはなっていましたね。

ただ、お風呂は非常に重要なんです。冬は寒くて、足の筋肉がパンパンになっちゃったりして、体調崩す人もいっぱいいたんです。そういうときお風呂を一刻も早く開けたいという願いは、多くの市民から確かにあった。

お風呂屋さんとかスーパー銭湯が、もし地震に被災したら、その風呂を復旧させるってことを地域

の力でやるのも大切です。いろんな団体や組織の救援でもって、それぞれの学校にお風呂ができたりしたんだけど、ここがオッケーになったらそれを転戦させると、まだ行き届いていないところに今度移そうというね。そういう総合的な判断ができなかったんだと思う。もしかしたら、それぞれの学校のネットワークがもっとスムーズだったら、過不足や不公平がなくなったかもしれないですね。

情報がモノと一緒に動かなかったのが一番のストレスだった。情報とモノ（救援物資）とをいかに同時にうまく動かすかってこと、これが大切です。日ごろのつながりが大切になってきます。地震が起きてから「釜利谷高校の川手先生って誰だったっけ？」ってそこから始まったんじゃダメで、「あっ、あそこには釜利谷の川手先生がいるんだ」というのを知っていれば、そのネットワークが活用できるわけです。だからそういうつながりってすごく大切でした。

こんなのでお答えになったのでしょうか？

**司会** きょうは、わざわざ遠方からお越しくださいましてありがとうございます。非常に参考になりました。どうもありがとうございました。

**住田** みなさん、今日はお集まりいただきありがとうございます。

#### 【参考サイト】

住田功一著 **阪神淡路大震災ノート『語り継ぎたい。命の尊さ』** のページ  
<http://home.kobe-u.com/top/newsnet/sinsai/book/book>

**阪神淡路大震災 [写真調べ学習] プロジェクト** の公式サイト  
<http://home.kobe-u.com/sinsai/>